日本家政学会誌　Vol. 63　No. 4　193 ～ 203（2012）

資　料

幼稚園３歳児の日常的な母子のかかわりと園生活の進行に伴う母親の気持ちの変化

権田あずさ [1*]，今川真治 [2]
（[1] 広島大学大学院，[2] 広島大学）

原稿受付 平成 23 年 3 月 4 日；原稿受理 平成 24 年 1 月 7 日

Evaluation of Mothers' Daily Care of Their Three-year-old Children and Their Feelings toward Their Children as the Latter Settle into Kindergarten

Azusa GONDA[1*] and Shinji IMAKAWA[2]
[1]*Graduate School of Hiroshima University, Hiroshima 739-8521*
[2]*Hiroshima University, Hiroshima 739-8521*

This study aims to investigate the type of care provided by mothers for their three-year-old children on a daily basis and elucidate their feelings toward their children as the latter join and settle into kindergarten.

The following results were obtained: (1) Scores of child care behavior decreased after their children's admission to kindergarten, but those of mothers' companionship with their children showed no consistent tendency. (2) Mothers of children who speak about their friends and teachers and do the same thing as they did in the kindergarten that day at home, do not worry about their children not being able to make friends or of disobeying their teachers. (3) Mothers who worried about their child's adjustment to kindergarten and felt lonely throughout the six-month study period were first-time mothers.

Keywords：Three-year-old Children　3歳児，Entering Kindergarten　幼稚園入園，Mothers' Feelings for Their Children　母親の気持ち

1. 背景と目的

子どもの発達段階のうち，２歳から３歳ごろは，初期的な自我が芽生え始めるため，自己主張の一環として親を困らせるような行動をとったり，わがままを言ったりする時期である．つまりこの頃は，子どもが母親との信頼関係を軸にしながら，周りの環境へ働きかけ，自律から自立への歩みを始める時期であるとも言えよう．自我の芽生えは，強い自己主張や積極性，活動性となって現れ，それ自体は個性を育むこととも深いつながりがある．そしてその一方で，自我の芽生えは，同年齢や異年齢の子どもとのかかわりを通して，生涯発達の中でも極めて重要な，他者と共に生きていく力，すなわち社会性を身に付けていく契機となるのである．

平成 23 年 5 月に文部科学省が行った学校基本調査 [1)] によると，幼稚園在園児数はおよそ 152 万 6 千人であった．同じく，平成 23 年 4 月に厚生労働省が行った調査 [2)] では，保育所における３歳以上の在所児数はおよそ 134 万 9 千人であり，これらの数字から，多くの子どもたちが３年保育のために３歳から幼稚園や保育所に通っていることがわかる．幼稚園や保育所などの集団保育施設は，それ以前には大人との関係を中心に生活をしてきた子どもたちが，初めて家庭外でほぼ同年齢の子どもたちと仲間関係を形成し，仲間関係の原体験を培う重要な場である [3)]．子ど

* To whom correspondence should be addressed
E-mail：d101226@hiroshima-u.ac.jp

もにとって集団保育施設がそのような場となるには，子どもが集団保育施設に適応する必要がある．平井ら[4]は，幼児の集団的適応過程を外面的適応（集団や斉一活動への順応）と内面的適応（活動への興味や関心の強さ，積極性，満足度など）の両面から検討している．これを踏まえて森上[5]が「個人適応と集団適応とが調和的に発達することが必要」であると述べているように，園生活への適応という場合，単純に幼児が園のルールや活動に順応していく過程のみをみればよいというわけではなく，幼児自身が能動的に園の環境に働きかける必要がある．七木田ら[6]は，適応を「園環境における様々な影響の中で幼児自身が能動的に関わっていく過程」と定義しており，本研究で「適応」を述べる場合には，この定義に従うこととする．一方，彼らの家庭と親子関係に目を向ければ，この時期は，子どもにとっては親離れ，親にとっては子離れの第一歩となる重要な時期でもある．根ヶ山[7]によれば，母子分離は，子どもと母親を相互に相手から解放させ，周囲とのさまざまなかたちでの接触を可能にし，子どもが個としての自立性を獲得していく重要なプロセスである．

先に述べたように，3歳ごろになると，幼児の心には自我が芽生え始める．園原ら[8]は，3歳ごろの子どもは母親から独立したいという気持ちと，まだ母親に甘えたいという気持ちとの板挟みになって不安定な状態であるという．このような中で，3歳から幼稚園や保育所に通い始める幼児は，どのように園生活をスタートさせるのだろうか．また同時に，そのような3歳児の親は，どのような気持ちで子どもを集団保育の場に送り出すのだろうか．

本研究では，3年保育で入園した3歳児の母親に着目し，まず，子どもを初めて幼稚園へ預ける母親が，日常的に子どもにどのような世話行動を行い，どの程度一緒に行動（以下，共行動）しているのかを明らかにする．その上で，子どもが園生活に適応していくプロセスを母親がどのように捉えているのかと，園生活の進行に伴って母親の子どもに対する気持ちがどのように変化するのかを明らかにすることを本研究の目的とした．

2. 方　法

(1) 調査対象者

本研究の調査対象者は，2009年4月に，広島県H市内F幼稚園の3歳児クラスに3年保育で入園した園児19名（男児9名，女児10名）の母親であった．男児の中に1組の二卵性双生児がいたため，実際に研究対象としたのは18名の母親であった．調査開始時における対象者18名の平均年齢は，33.8歳（レンジ：24～44歳）であった．子どもの平均月年齢は3歳6ヵ月（レンジ：3歳0ヵ月～4歳0ヵ月）であった．表1に子どもの属性を示す．

表1．子どもの属性（4月時点）

子ども	月齢	きょうだいの有無	
		兄姉	弟妹
Am	3歳 9ヵ月		
Bm	3歳 2ヵ月		
Cm	3歳 7ヵ月		○
Dm	3歳 8ヵ月	○	○
Em	3歳 8ヵ月	○	
Fm	3歳 5ヵ月		○
Gm	4歳 0ヵ月	○	
Hm	3歳10ヵ月	○	○
Im	3歳 1ヵ月	○	
Jf	3歳 1ヵ月		○
Kf	3歳 0ヵ月		
Lf	3歳 5ヵ月	○	
Mf	3歳 3ヵ月		
Nf	3歳 9ヵ月		○
Of	3歳 0ヵ月	○	
Pf	3歳 4ヵ月		
Qf	3歳 7ヵ月	○	
Rf	3歳 7ヵ月		○
Sf	3歳 5ヵ月	○	

注：mは男児，fは女児を表す．

表2．母親の子どもに対する世話行動と共行動に関する質問項目

世話行動	共行動
着替えを手伝う	一緒に朝食を食べる
トイレを手伝う	一緒に夕食を食べる
絵本の読み聞かせをする	一緒にお風呂に入る
寝かしつける	自分が担当している家事を一緒にする
	買い物に連れて行く
	家の中で一緒に遊ぶ
	近くの公園や広場に行って遊ぶ

(2) 手続き

本研究では，18名の母親に対して2種類の質問紙調査を実施した．1つは，日常的な母子の関わりを明らかにするための質問紙（以下，質問紙1）であり，もう1つは，家庭での子どもの様子を母親がどのように捉えているかと，子どもの幼稚園への適応に対する母親の気持ちを問う質問紙（以下，質問紙2）であった．

1）質問紙1について

本研究では，子どもが幼稚園に入園する以前の母子の日常的な関わりと，子どもが幼稚園へ入園してからの母子の日常的な関わりの変化を知るために，2009年4月に入園前を振り返っての調査，7月に入園してからの調査と，同じ調査を2回繰り返して実施した．

質問紙1は，母親が子どもに対して行っている日常的な世話行動と共行動を問うもの（表2）で，種々の交渉の

頻度を４件法ないし５件法で質問した．このうち，「一緒にお風呂に入る」という質問に対しては，母子のお風呂での様子について，「自分が担当している家事を一緒にする」という質問に対しては，母子が一緒にした家事の内容について具体的な行動を選択肢としてあげ，あてはまるもの全てを回答してもらった．

2）質問紙２について

質問紙２は子どもが幼稚園へ入園した 2009 年４月から９月の間に全６回実施し，各回の調査は，直前の実施から 20 日間以上空けて実施した．

質問紙２は，主に２種類の質問群からなる．第１の質問群は，家庭での子どもの様子に関する質問群で，幼稚園へ通い始めた子どもの日常の様子を，母親がどのように捉えているかを問うものであった．具体的には，「家で友達や先生のことを話すか」や「その日幼稚園でやったことを家でもやってみようとするか」など４つの質問項目から構成されている．第１の質問群に対する回答法としては，「全く～ない」から「とても～である」の５件法で回答するものと，「はい」または「いいえ」で回答し，「はい」の場合はその具体的な内容を記述してもらうものがあった．また，母親が家庭での子どもの様子に関して気付いたことを自由に記述できるよう，自由記述欄も設けた．

第２の質問群は，母親の気持ちに関する質問群で，子どもを幼稚園へ預けることに対して母親がどのような気持ちを抱いているかを問うものであった．具体的には，「友達ができたか心配か」や「先生の言うことが聞けているか心配か」という，子どもの幼稚園生活への適応に対する母親の気持ちを問う質問項目と，「幼稚園へ預けている間，子どものことが気になるか」や「子どもと離れているとさみしいと感じるか」という，幼稚園へ子どもを預けることに対する母親の気持ちを問う質問項目から構成されている．第２の質問群に対する回答法は，「全く～ない」から「とても～である」の５件法であった．

3．結果および考察

（1）質問紙１（日常的な母子の関わり）

２回の質問紙調査は，18 名の母親に１部ずつ（二卵性双生児の母親は２部）配布・回収し，１回目の有効回収数は 19 部，２回目は 18 部であった．そのため，実際に分析対象としたのは 18 部（男児の母親７名，女児の母親 10 名）であった．

ｉ）世話行動

本研究では，質問紙１の子どもに対する母親の世話行動について，子どもに対する母親の世話頻度が高い順に得点を与えた．（例えば，「着替えを手伝う」という質問項目に関しては，「主に自分が担当して着替えを手伝った」を３点，「着替えが難しい場合（手伝ってと言われた場合）のみ主に自分が手伝った」を２点，「主にパートナーが担当して着替えを手伝った」および「着替えが難しい場合（手伝ってと言われた場合）のみ主にパートナーが手伝った」を１点，「子どもは自分一人で着替えることができる」を０点とした．）

４種類の世話行動について，17 名の母親の世話行動得点の平均値を算出し，入園前後の変化を示したのが図１である．入園後のいずれにおいても，母親の世話行動得点が最も高かったのは「寝かしつける」であった．入園前において「寝かしつける」に次いで得点が高かったのは「トイレを手伝う」，その次は「着替えを手伝う」であったが，いずれの得点も入園後には低下した．「絵本の読み聞かせをする」は入園前には最も得点が低かったが，入園後には，「寝かしつける」に次いで得点が高かった．

入園前後における世話行動得点の変化を，男児の母親と女児の母親に分けて示したのが図２である．入園前に男児の母親の世話行動得点が最も高かったのは「トイレを手伝う」であったが，女児の母親のそれは最も低かった．一方，入園前において，「絵本の読み聞かせをする」の世話行動得点は，男児の母親では最も低かったのに対し，女児の母親では最も高かった．入園後を見てみると，男児の母親と女児の母親の「着替えを手伝う」と「トイレを手伝う」の世話行動得点はいずれも低下し，男児の母親の「絵本の読み聞かせをする」の世話行動得点は上昇した．

以上より，母親が子どもに対して最も行っていた直接的な世話行動は寝かしつけであり，子どもの入眠を手伝うことは母親の大きな役割行動であると思われた．一方，子どもの着替えやトイレに対する母親の手伝いが，入園前から入園後に低下したことは，子どもの発達がすすみ，必ずしも母親が手伝う必要がなくなったことを伺わせた．子どもの性別に見てみると，入園前後のいずれにおいても，男児の母親よりも女児の母親のほうが絵本の読み聞かせ得点が高かった．男児の母親では，入園前より入園後の読み聞かせ得点が高かったが，これは，入園前にはあまり行ってい

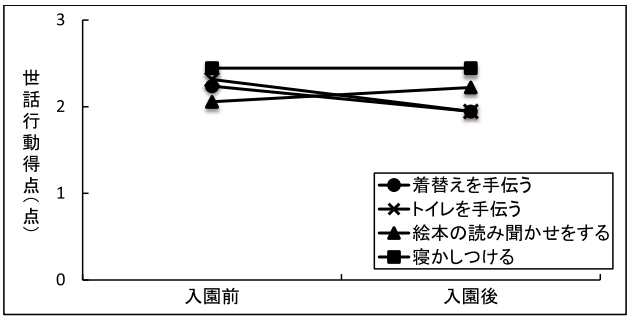

図１．子どもの入園前後における母親の行動別の世話行動得点の変化

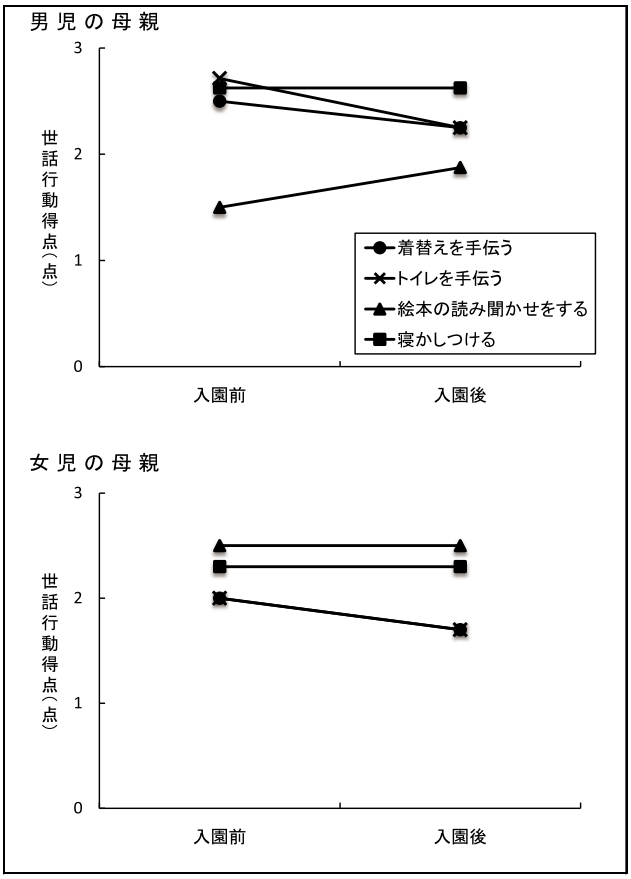

図 2．子どもの入園前後における男児の母親と女児の母親の行動別の世話行動得点の変化

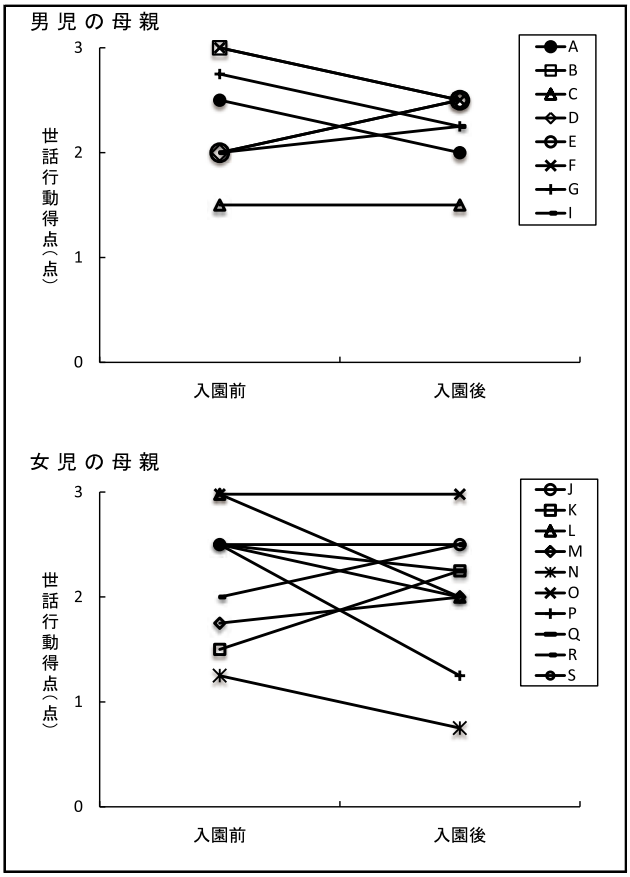

図 3．子どもの入園前後における母親個別の世話行動得点の変化

なかった読み聞かせを，男児の母親も入園後に行うようになったためと考えられる．女児の母親よりも男児の母親のほうが，子どもの着替えやトイレの手伝いをよく行っていたが，これらの結果は，子どもの性別によって，母親の世話行動の種類や頻度が異なることを示していた．

4 種類の世話行動得点の平均値を母親ごとに算出し，子どもの性別に入園前後の変化を示したのが図 3 である（図中のアルファベットは，個々の母親を表し，表 1 の子どものアルファベットと対応している．また，本報告では，同じ母親を表す場合でも，凡例の記号が図によって異なる場合があるが，これは図ごとに個々の母親の傾向を見やすくするためである）．

入園前に世話行動得点が最も高かった男児の母親は B と F，女児の母親は L と O（4 名とも 3.0 点）であり，世話行動得点が最も低かった男児の母親は C（1.5 点），女児の母親は N（1.3 点）であった．入園後に世話行動得点が最も高かった男児の母親は B と D と E と F（4 名とも 2.5 点），女児の母親は O（3.0 点）であり，世話行動得点が最も低かった男児の母親は C（1.5 点），女児の母親は N（0.8 点）であった．男児の母親 B と F，女児の母親 O は，入園前と入園後のいずれにおいても，母親の世話行得点が高く，男児の母親 C と女児の母親 N は世話行動得点が低かった．

ii）共行動

共行動に関する質問群についても，世話行動と同様の手順で個々の母親に得点を与えた．しかし，選択肢数の違いにより，4 点満点の質問と 3 点満点の質問があったため，3 点満点の質問に対する回答は 4 点満点に換算して分析した．

7 種類の共行動について，17 名の母親の共行動得点の平均値を算出し，入園前後の変化を示したのが図 4 である．入園前において，母親の共行動得点が最も高かったのは「一緒に夕食を食べる」，次いで「一緒に朝食を食べる」であり，これは入園後も同じであった．「一緒にお風呂に入る」と「自分が担当している家事を一緒にする」という共行動得点は，入園後に上昇し，「買い物に連れて行く」という共行動得点は入園後に低下した．

入園前後における共行動得点の変化を，男児の母親と女児の母親に分けて示したのが図 5 である．男児の母親と女児の母親のいずれにおいても，「買い物に連れて行く」

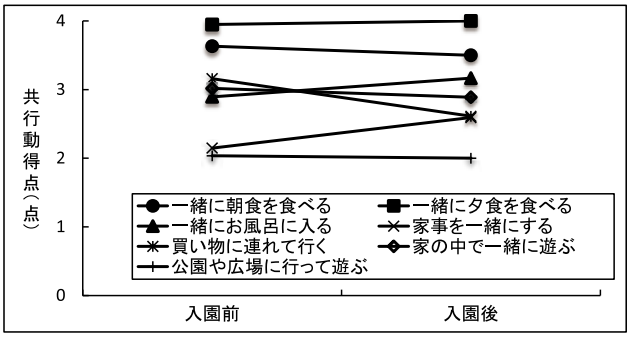

図 4. 子どもの入園前後における母親の行動別の共行動得点の変化

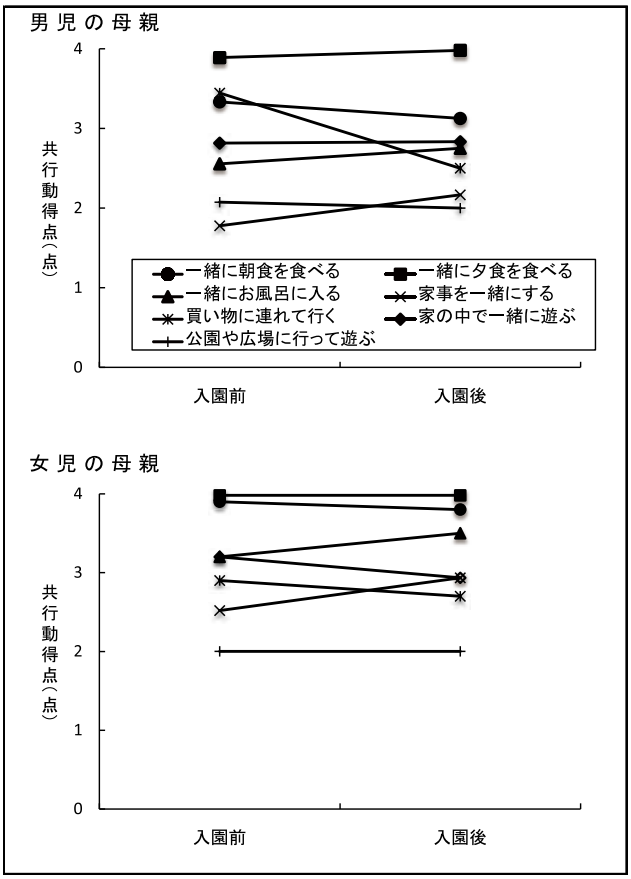

図 5. 子どもの入園前後における男児の母親と女児の母親の行動別の共行動得点の変化

という共行動得点が入園後に低下し，「一緒にお風呂に入る」と「自分が担当している家事を一緒にする」という共行動得点が上昇した．

以上より，7 種類の共行動のうち，母親が子どもと最も多く一緒にした行動は食事であり，これは子どもが幼稚園へ入園する以前にも入園後にも同じであった．男児の母親も女児の母親も，子どもが幼稚園へ入園してから，子どもを買い物に連れて行くことが少なくなったが，これは子どもが幼稚園へ行っている間に買い物を済ますことが多くなったためではないかと考えられた．また，男児の母親も女児の母親も，子どもが幼稚園へ入園してから子どもと一緒にお風呂に入ったり，一緒に家事をしたりすることが多くなったことが伺えた．お風呂での様子について，「幼稚園の話をする」という回答もみられたことから，お風呂が親子が 1 日のできごとを共有する場として機能するようになったことが伺えた．一方，家事を一緒にするという共行動が入園後に増加したとみられることについては，子どもの入園後における母親の教育的な配慮の表れとも考えられる．あるいは，幼稚園生活の影響を受けて，子どもが自ら積極的に家事を手伝うようになった可能性もあるだろう．

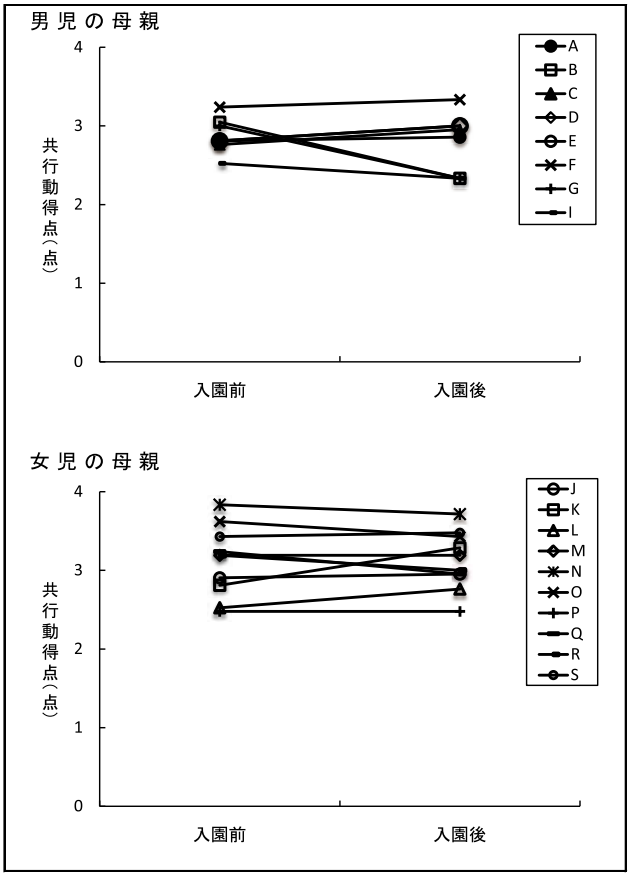

図 6. 子どもの入園前後における母親個別の共行動得点の変化

7 種類の共行動得点の平均値を母親ごとに算出し，子どもの性別に入園前後の変化を示したのが図 6 である．男児の母親 F は入園前後のいずれにおいても男児の母親の中で最も共行動得点が高く（入園前：3.24 点，入園後：3.33 点），女児の母親 N も，入園前後のいずれにおいても女児の母親の中で最も共行動得点が高かった（入園前：3.83 点，入園後：3.71 点）．入園前に共行動得点が最も低かった男児の母親は I（2.52 点），女児の母親は P（2.48 点）であり，

入園後に共行動得点が最も低かった男児の母親はＢとＧとＩ（3名とも2.33点），女児の母親はＰ（2.48点）であった．

以上の結果より，絵本の読み聞かせを除いたすべての世話行動が，入園前から入園後に少なくなった．一方，共行動は，お風呂や家事など，子どもが幼稚園へ入園する以前よりも入園した後に多くなったものや，買い物のように子どもの入園後に少なくなったものがあった．母親の世話行動や共行動は，子どもの発達と関連しており，子どもが様々なことを自分でできるようになるに従って，母親が世話をしたり手伝ったりする必要は徐々になくなる一方，子どもの発達がすすむことで，母親が絵本を読み聞かせたり，一緒に家事をする頻度は高くなるのであろう．男児の母親Ｂと女児の母親Ｏは，入園前後のいずれにおいても世話行動得点が高い母親であったが，いずれの子どももクラスの中で月齢の低い子どもであり，母親の子どもへの世話行動が他の母親よりも必要であったと思われる．一方，入園前後のいずれにおいても世話行動得点が最も低かった女児の母親Ｎの子どもは，女児の中で最も月齢の高い子どもであった．

（2）質問紙２（家庭での子どもの様子と子どもに対する母親の気持ち）

1）母親から見た家庭での子どもの様子

「幼稚園へ行くことを楽しみにしているか」という質問に対しては，子どもの性別に関係なく，また，園生活の進行によらず，ほとんどの母親が子どもは幼稚園へ行くことを楽しみにしていると認識していた．

「家で友達や先生のことを話すか」という質問に対する5件法の選択肢について，子どもが話す頻度の高い順に，「よく話す」に4点，「話す」に3点，「ときどき話す」に2点，「あまり話さない」に1点，「話さない」に0点を与えて分析を行った．なお，本質問をはじめとする5件法による質問項目の分析においては，入園後の6回の調査を前半3回（前期）と後半3回（後期）の2期に分けて，入園後の変化を分析した．

「家で友達や先生のことを話すか」という質問に対する母親の回答の平均得点を図7に示す．男児と女児のいずれの母親も，前期よりも後期のほうが得点が高く，前期と後期のいずれにおいても，男児の母親よりも女児の母親のほうが得点が高かった．

この質問に対する個々の母親の回答をみると（図8），男児の母親Ｃと女児の母親Ｓは，前後期ともに最も得点が高かった．また，一部の母親を除くほとんどの母親で，前期から後期にかけて得点が上昇した．本質問紙の自由記述欄において，男児と女児のいずれの母親にも，「友達の名前が家での会話の中に出てくるようになった」や，「今まで男の子の友達の名前しか出てこなかったが，女の子の名前も出るようになった」などのような，友達に関する記述が，前半の調査よりも後半の調査で多くみられたことからも，子どもは園生活が進行するにつれて，家で友達や先生のことを話すようになることがわかった．

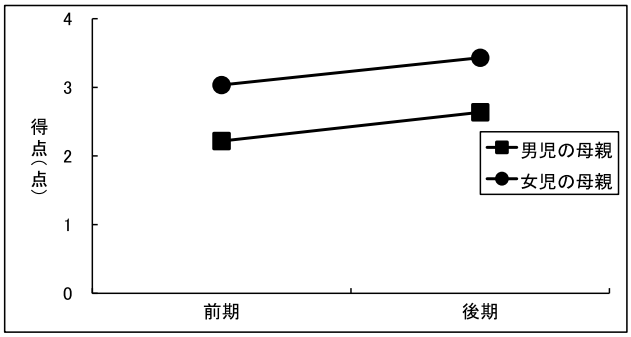

図7．前後期における「家で友達や先生のことを話すか」に対する母親の回答得点の変化

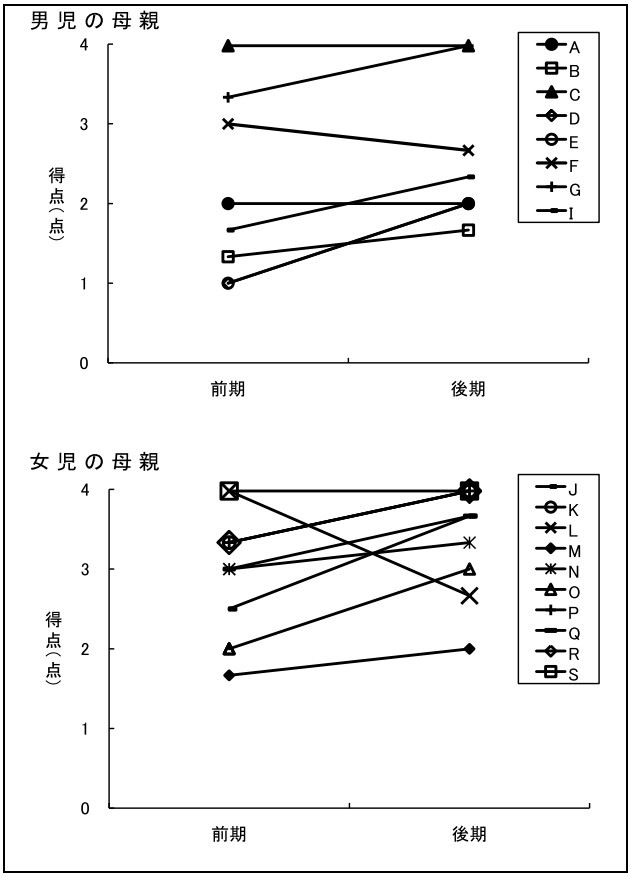

図8．前後期における「家で友達や先生のことを話すか」に対する母親個別の回答得点の変化

「家で幼稚園でのできごとを話すか」という質問に対しては，子どもの性別に関わらず，また園生活の進行によらず，ほとんどの母親が「はい」と回答し，子どもは家で幼稚園でのできごとを話していると認識していた母親が多

かった．

子どもが家で話す幼稚園でのできごととして，全ての調査回で挙げられたのは，その日に遊んだ内容についてであり，これは子どもの性別に関わりなく家で話されていた．また，いずれの母親にも共通していたのは，入園してすぐの１回目の調査（４月）では，「何をしたか」（絵を描いたこと，水遊びをしたこと等）という内容が中心であったのに対し，２回目以降の調査では，「誰としたか」（友達とけんかしたこと，友達と遊んだこと等）という回答が増加したことであった．また，子どもが幼稚園でのできごとを話した具体的な内容として，「誰と何をしたか」と回答した女児の母親が２回目の調査（５月）からみられ始めたのに対し，男児の母親でそのような回答が出現したのは３回目の調査（６月）からであった．さらに，自由記述欄において，女児の母親では２回目の調査から「友達との関わりが増えてきたような気がする」など，友達に関する記述がみられ始めたのに対し，男児の母親でそのような記述が出現したのは４回目の調査（７月）からであった．

男児も女児も入園当初は「何をしたか」について話すのみであったものが，２回目の調査からは，「誰としたか」についてよく話すようになったことは，子どもの幼稚園生活への適応や発達に伴う変化であると考えられ，子どもに友だちができていく過程，あるいは他児との関係や他児の存在を認知していく過程が伺えた．また，このような変化は，男児よりも女児のほうが早く始まるらしいことが明らかとなった．

「その日幼稚園でやったことを家でもやってみようとするか」という質問に対して，女児の母親では，ほぼ全ての母親が，「はい」（子どもはその日幼稚園でやったことを家でもやってみようとした）と回答した．一方，男児の母親では「いいえ」と回答したものもみられたが，全体的にみると，ほとんどの母親が「はい」と回答した．

女児がその日幼稚園でやったことを家でもやってみようとしたこととしては，歌やダンスと回答した母親が多かった．男児の母親にも歌と回答したものは多かったが，５回目（８月の夏休み明け）以降の調査では１人もいなかった．男児では，３回目以降の調査に工作と回答したものがみられ始めたが，女児では工作は４回目（７月）以降の調査から認められた．また，１回目から４回目の調査までは，男児の母親も女児の母親も，子どもがその日幼稚園でやったことを家でもやってみようとしたこととして，手遊びと回答したものがいたが，５回目以降の調査では１人もいなかった．その他，女児にみられた回答として，色水での遊びやごっこ遊び，だんご虫探しなどがあった．

男児も女児も，その日幼稚園でやったことを家でもやってみようとしたこととして最も多かったのは，歌をうたうことであった．男児も女児もこれに加えて工作をするようになるが，男児は最終的に歌ではなく工作が主になるようであった．また，男児よりも女児のほうが，その日幼稚園でやったことを家でもやってみようとした遊びのレパートリーが多かった．

2）子どもの幼稚園生活への適応に対する母親の気持ち

「友達ができたか心配か」という質問に対する５件法の選択肢について，母親の子どもに対する心配の度合いが大きい順に，「とても心配である」に４点，「少し心配である」に３点，「どちらともいえない」に２点，「あまり心配でない」に１点，「全く心配でない」に０点を与えて分析を行った．

「友達ができたか心配か」という質問に対する母親の回答の平均得点を図９に示す．前後期のいずれにおいても，女児の母親よりも男児の母親のほうが得点が高く，男児の母親のほうが，子どもに友達ができたかどうかを心配していた．また，男児の母親と女児の母親のいずれの得点も，前期から後期にかけての変化は認められなかった．

この質問に対する個々の母親の回答をみると（図 10），前後期のいずれにおいても，「全く心配でない」あるいは「あまり心配でない」と回答した母親（２点未満）は，男児の母親に５名（C, D, E, G, I），女児の母親に７名（K, L, O, P, Q, R, S）おり，そのうち女児の母親Ｏは，６回の調査のすべてで，「全く心配でない（0 点）」と回答した．一方，男児の母親Ａは，６回の調査のすべてで，「とても心配である（４点）」と回答した．女児の母親Ｍは，前後期のいずれにおいても，女児の母親の中で最も得点が高く，前期よりも後期のほうが得点が高かった．

「先生の言うことが聞けているか心配か」という質問に対する母親の回答の平均得点を図 11 に示す．前後期のいずれにおいても，女児の母親よりも男児の母親のほうが得点が高かった．

この質問に対する個々の母親の回答をみると（図 12），男児の母親Ａと女児の母親Ｊは，前後期のいずれにおいても最も得点が高かった．このうち男児の母親Ａは，前

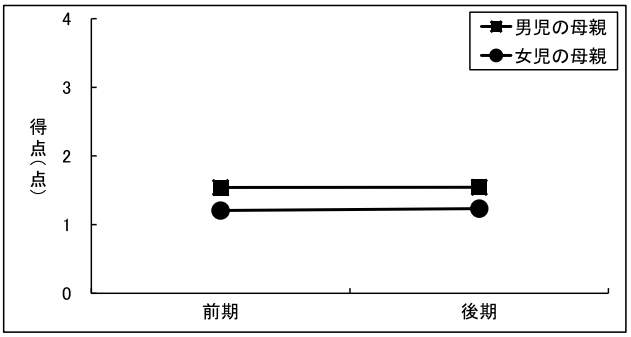

図９．前後期における「友達ができたか心配か」に対する母親の回答得点の変化

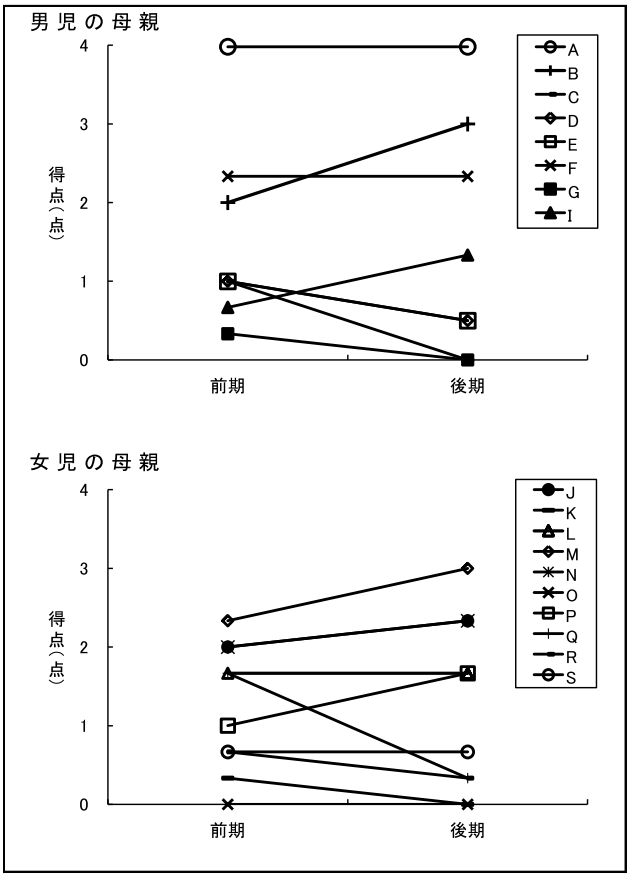

図 10. 前後期における「友達ができたか心配か」に対する母親個別の回答得点の変化

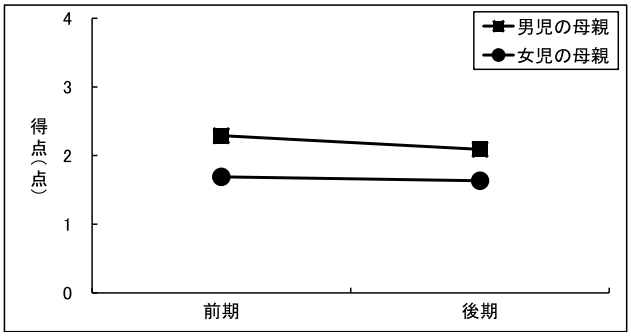

図 11. 前後期における「先生の言うことが聞けているか心配か」に対する母親の回答得点の変化

記の「友達ができたか心配か」と同様に，6 回の調査のすべてで，「とても心配である（4 点）」と回答した．母親 A と J のほかに，前後期いずれにおいても一貫して先生の言うことが聞けているか心配である（2 点より大きい）と回答した男児の母親は C と F，女児の母親は L，M，N，P であったが，このうち男児の母親 F と女児の母親 L，M は，前期よりも後期の得点のほうが高かった．一方，前期において女児の母親 K と O と S は，前期には最も得点が低かっ

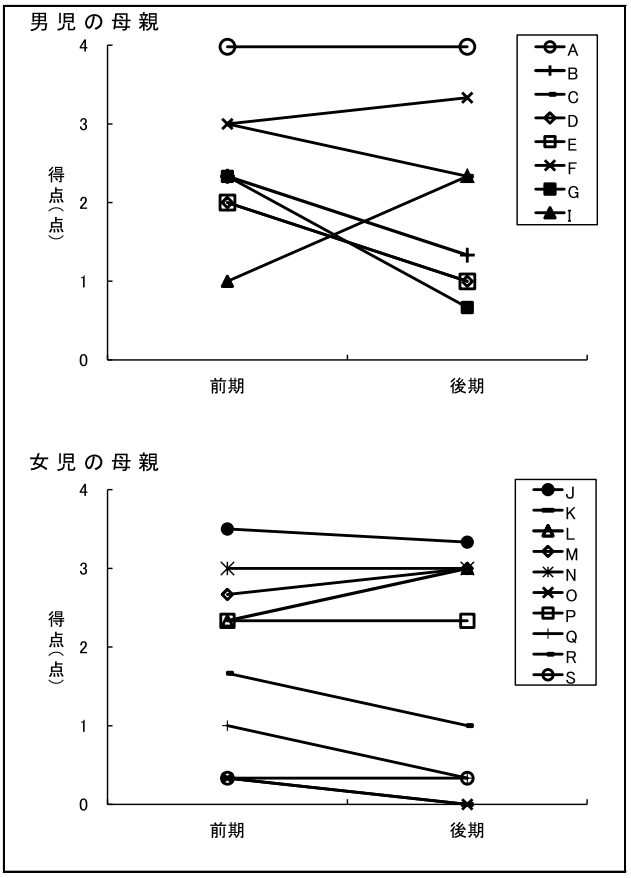

図 12. 前後期における「先生の言うことが聞けているか心配か」に対する母親個別の回答得点の変化

たが，このうち母親 K と O の得点は後期でさらに低下した（いずれの母親も 0 点）．

以上の結果をみると，子どもに友達ができたかよりも，先生の言うことが聞けているかのほうが心配であると回答した母親が多かった（図 9，図 11）．また，友達ができたかや，先生の言うことが聞けているかについて，心配ではないと回答した母親の多くは，子どもが家で友達や先生のことをよく話したり，その日，幼稚園でやったことを家でもやってみようとしたと回答していた（男児の母親：G，女児の母親：K，O，R，S）．子どもが家で幼稚園のことを話したり幼稚園でやったことを家でもやってみたりすることは，母親が子どもの心理的発達を認識しやすく，母親の子どもに対する安心感を強めたと言えるかもしれない．また，入園してすぐの 1 回目の調査から，6 回目の調査（9 月）まで一貫して子どもに友達ができたか心配であり，先生の言うことが聞けているか心配であると回答した母親の子どもはすべて第 1 子であった（男児の母親：A，F，女児の母親：J，M，N）．

3）幼稚園へ子どもを預けることに対する母親の気持ち

「幼稚園へ預けている間，子どものことが色々と気にな

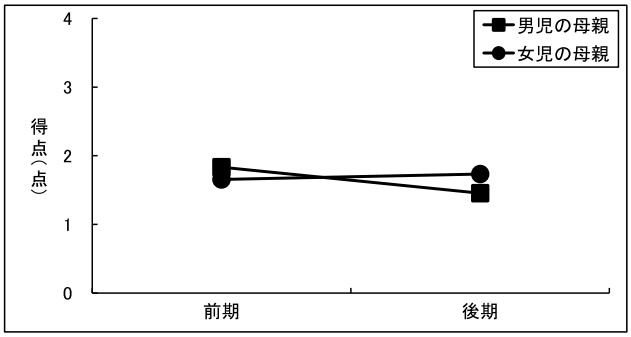

図 13．前後期における「幼稚園に預けている間，子どものことが色々と気になるか」に対する母親の回答得点の変化

るか」という質問に対する５件法の選択肢について，母親の気になる気持ちの強い順に,「とても気になる」に４点,「少し気になる」に３点,「どちらともいえない」に２点,「あまり気にならない」に１点,「全く気にならない」に０点を与えて分析した.

この質問に対する母親の回答の平均得点を図13に示す. 男児の母親の得点は，前期よりも後期のほうが低く，一方，女児の母親の得点は前期よりも後期のほうが高かった.

また，この質問に対する個々の母親の回答をみると（図14)，男児の母親と比べて女児の母親の回答得点のばらつきが大きく，女児の母親の気持ちの個別性が大きいことが明らかとなった. また,男児の母親ＡとＦ,女児の母親Ｋは,前後期のいずれにおいても，最も得点が高く，そのうち女児の母親Ｋは,６回の調査のすべてで,「とても気になる（4点)」と回答した. 一方，男児の母親Ｉと女児の母親Ｏは,前後期のいずれにおいても，最も得点が低く，そのうち女児の母親Ｏは，６回の調査のすべてで,「全く気にならない（０点)」と回答した.

「子どもと離れているとさみしいと感じるか」という質問に関しても同様に母親のさみしい気持ちの強い順（「とてもさみしい」４点～「全くさみしくない」０点）に得点を与えた.

この質問に対する母親の回答の平均得点を図15に示す. 前後期のいずれにおいても男児の母親よりも女児の母親のほうが得点が高く，いずれも前期よりも後期のほうが得点が低かった.

また，この質問に対する個々の母親の回答をみると（図16)，前問と同様に，女児の母親の回答得点のばらつきは男児の母親のそれよりも大きかった. 前期において，男児の母親ＡとＢとＩは，男児の母親の中で最も得点が低かったが，このうち男児の母親ＢとＩの得点は後期でさらに低下し，０点であった. 女児の母親Ｏは，前期では「どちらともいえない（２点)」と回答したが，後期では「全くさみしくない（０点)」と回答し，女児の母親の中で最も

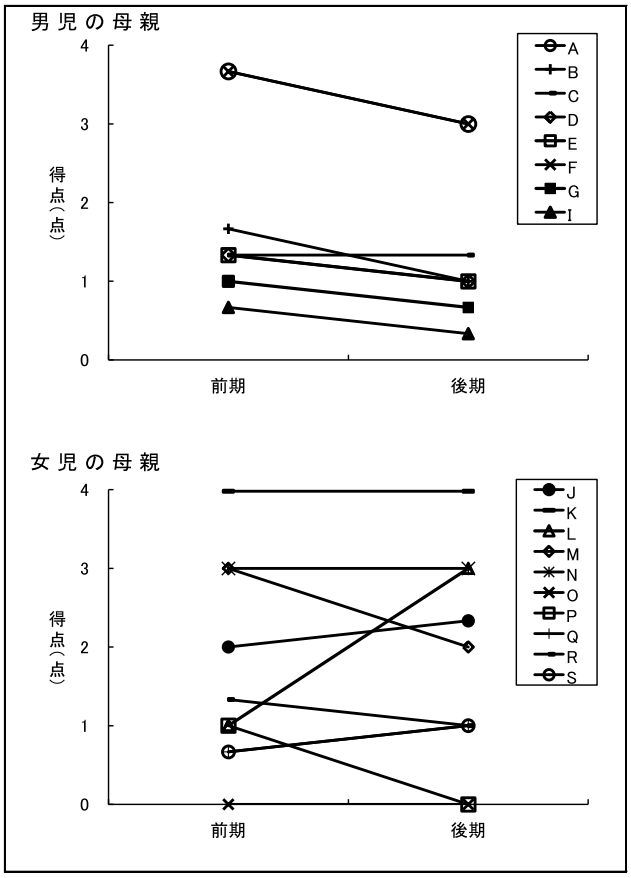

図 14．前後期における「幼稚園に預けている間，子どものことが気になるか」に対する母親個別の回答得点の変化

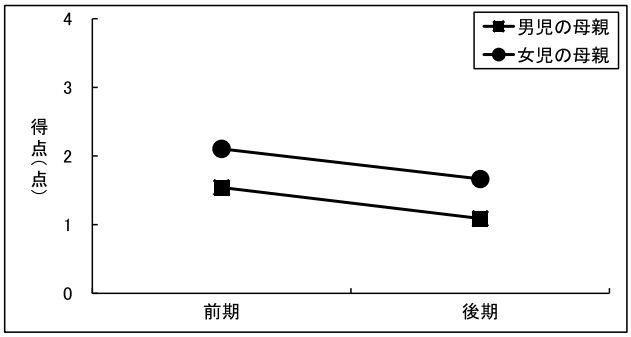

図 15．前後期における「子どもと離れているとさみしいと感じるか」に対する母親の回答得点の変化

得点が低かった. 男児の母親Ｆと女児の母親Ｋは，前後期のいずれにおいても最も得点が高く，そのうち女児の母親Ｋは，６回の調査のすべてで,「とてもさみしい（４点)」と回答した. 母親Ｋは,「幼稚園へ子どもを預けている間,子どものことが気になるか」という質問に対して，６回の調査すべてで「とても気になる」と回答した母親であった.

以上の結果より，入園後まもない前期に比べ，後期になると子どもと離れることに対してさみしくないと感じる母

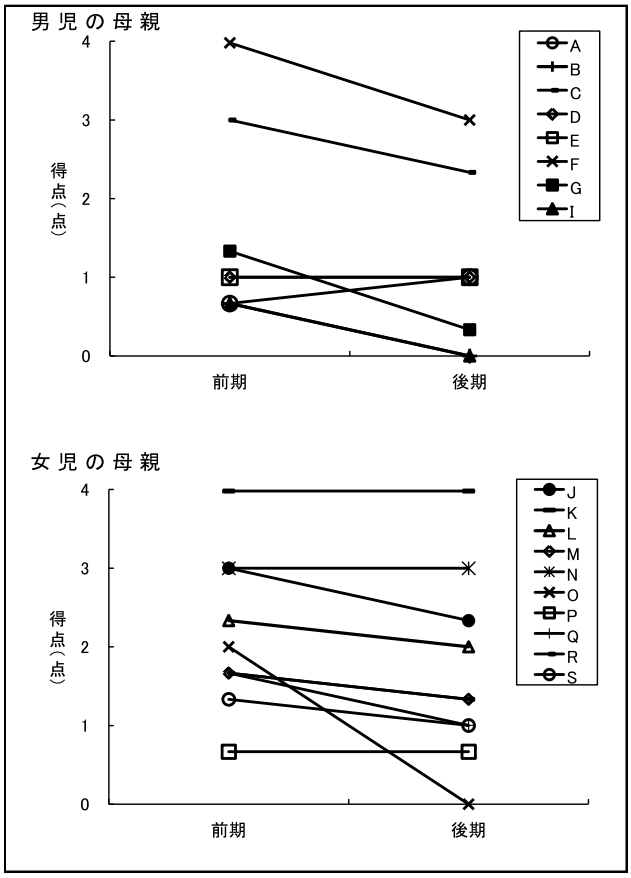

図 16. 前後期における「子どもと離れているとさみしいと感じるか」に対する母親個別の回答得点の変化

親が増加したことは，子どもと離れることに対する母親の慣れの過程を表していると思われる．また，入園してすぐの 1 回目の調査から 6 回目の調査までほぼ全期間を通して，幼稚園へ預けている間，子どものことが気になると回答した男児の母親は A と F，女児の母親は K と N であり，子どもと離れてさみしいと回答した男児の母親は F，女児の母親は J，K，N であった．さらに，男児の母親 A，F と女児の母親 J，N は，2）における 6 回の調査すべてで先生の言うことが聞けているか心配であると回答し，男児の母親 A は，友達ができたかとても心配であり，先生の言うことが聞けているかとても心配であると回答した．これらの母親の子どもはすべて第 1 子であった．

ここまでみたように，入園後しばらく経過した調査後期になっても，子どもに友達ができたかどうかや，先生の言うことが聞けているかどうかなど，子どもの園生活への適応に対する母親の心配感や，子どもと離れることに対するさみしさを強く感じていた母親の子どもは，すべて第 1 子であった．つまり，初めて幼稚園へ子どもを預ける母親は，そうでない母親よりも子どもの幼稚園生活への適応を心配し，子どもと離れることに対して長期間に渡ってさみしさを感じていたことが明らかとなった．

4. 総　括

子どもの着替えを手伝ったり，トイレを手伝ったりするような，日常的な世話行動の頻度は，ほとんどの母親において入園前から入園後に低下した．これは母親の子どもに対する世話行動が，子どもの発達や意欲と深く関連するためであると考えられる．子どもの発達が遅い場合，母親は子どもの生活行動を手伝う必要があるだろうし，逆に自分で身の回りのことができる子どもは必ずしも母親が手伝う必要はない．女児の母親 O が，入園前にも入園後にも最も世話行動得点が高かったのは，子どもの月齢がクラスで最も低く，母親が子どもを手伝う必要があったためであると考えられた．

一方，母親が子どもと一緒にご飯を食べたり，一緒にお風呂に入ったりするような共行動の頻度が入園前に最も高かった母親（男児の母親 F，女児の母親 N）は，入園後における共行動の頻度も高かった．この 2 名の母親は，調査期間を通して，先生の言うことが聞けているか心配であり，幼稚園へ子どもを預けている間，子どものことが気になり，子どもと離れているとさみしいと回答したが，子どもはいずれも第 1 子であった．母親が第 1 子を幼稚園へ預ける場合，そうでない場合よりも，母親が子どもを幼稚園へ預けることに心配感を抱いたり，子どもと離れることに対してさみしさを感じたりすると考えられた．さらに，日常的に共行動の頻度が高い母親は，子どもと離れることに対して強い不安感を抱き，さみしいと感じていたことも明らかとなった．しかし，子どもが第 1 子である男児の母親 A や女児の母親 M は，調査期間中ずっと，友達ができたか心配であり，先生の言うことが聞けているか心配であり，幼稚園へ預けている間，子どものことが気になると回答したにも関わらず，共行動得点は入園前後ともに高くなかった．母親 F，N と母親 A，M との違いは，子どもと離れていることに対するさみしさであると考えられた．子どもが第 1 子であり，子どもと離れることに対してさみしいと強く感じていた母親は，日常的な子どもとの共行動の頻度が高い母親であったと言える．

世話行動得点の高さと，子どもと離れることに対する母親の気持ちとの間には関連が認められなかったが，共行動得点が最も低かった母親（入園前：I，P，入園後：B，G，I，P）のほとんどが，子どもと離れることに対して，「気にならない」あるいは「さみしくない」と回答したことから，子どもと離れることに対する母親の気持ちと，母子の日常的な共行動の頻度との間には何らかの関係があると考えられる．しかし本研究の場合，対象とした母親は 1 園のわずか 17 名であるため，そこから一般的傾向や結論を導き

出すことには慎重でなければならない．母親やその子どもがもつ属性はさまざまであり（例えば，母親の年齢，子どもの性，父親の育児参加度，病歴の有無，入園までの環境，親の養育方針など），母親の対児行動や子どもに対する感情に影響を与える要因は多様である．また，幼稚園の保育方針や受け入れ態勢も母子関係に影響を与える要因となりうるだろう．さらに，母子関係は母から子への一方向的な関わりを指すものではなく，子から母への関わり方も母親の対児行動や感情に影響を与えるはずである．今後は対象者の数を増やすとともに，これらの要因との関連についての分析も進めていきたい．

引　用　文　献

1）文部科学省：平成 23 年度学校基本調査速報，2011

2）厚生労働省：平成 23 年保育所関連状況取りまとめ，2011

3）砂上史子，無藤隆：子どもの仲間関係と身体接触－仲間意識の共有としての他者と同じ動きをすること－，乳幼児教育研究，8，75-84（1999）

4）平井信義，千羽喜代子，森上史朗，石橋すみえ，今井節子，関真知子，岡田正章，沢文治，塩川寿平：3 歳児の集団教育施設における適応について－第 1 報－：（その 1）集団適応の過程とその個人差，日本保育学会大会研究論文集，27，257-258（1974）

5）森上史朗：個人適応と社会適応，保育のための乳幼児心理事典（pp.148-149），日本らいぶらり，東京，1980

6）七木田敦，林よし恵，松本信吾，久原有貴，日切慶子，藤橋智子，正田るり子，菅田直江，田中惠子，落合さゆり，真鍋健，金子嘉秀：発達に課題のある幼児の幼稚園適応に関する実践的研究：適応過程とその関連要因の検討を中心に，広島大学 学部・附属学校共同研究紀要，39，45-50（2011）

7）根ヶ山光一：子育てと子別れ，子別れの心理学，福村出版，東京，1995

8）園原太郎，黒丸正四郎：母子分離，三才児（p.118），日本放送出版協会，東京，1967